

●発行日：2017年10月21日（土）

〒661-0035 兵庫県尼崎市武庫之荘3-19-3 TEL 06-4962-5876 FAX 06-4962-5877 e-mail info@gakurin.co.jp

[illegible]

学習の行き先 教科書以上の学習

小学生の学習姿勢をみると、教科書に載っている範囲の学習をしておけば、それで充分だと考えている子どもが少なくありません。本当にそうでしょうか。また、教科書に載っていないことは学習しない、という考えの子どももみられます。教科書外の事柄は必要のない知識なのでしょうか。

学校での学習の目的の一つは、基礎学力の養成です。これを「学校でのテストでよい点数をとるため」と捉えてしまえば、教科書範囲の学習だけで充分対応することができます。学校のテストは教科書から出題されるため、教科書を暗記してしまえばテストでよい点をとることはできます。しかし、それで果たして基礎学力の養成になっているのでしょうか。教科書に書かれた文面を頭に入れるだけでは、決して基礎学力の養成にはつながりません。身につけなければならないのは、「確かな学力」です。「確かな学力」とは、教科書を学習し、知識を自分のものとし、そこから自分で考えをめぐらし判断し、考えを表現する力をもつことです。その力は、教科書に書かれていることだけを学べばよいという姿勢では決して身につけることはできません。教科書で学習したことの中から興味のある事柄について自ら進んで学習を深めていくことで身につくものなのです。

近年、中学入試や高校入試では「活用問題」とよばれる問題の出題が増加しています。「活用問題」とは、習得した知識を通して、思考力・判断力・表現力を問うものです。これはまさに、先に述べた「確かな学力」を問われ、教科書の範用を暗記しただけでは解答することは

できません。ただ、入試で点をとるために、教科書だけではなく、教科書の範囲外も学習するべきだというわけではありません。「確かな学力」を培っていくことは、その後の学習を容易にし、新たな探究の芽を育てていくことにつながるからです。

それでは、どうすれば子どもたちに「確かな学力」をつけようという意識をもたせることができるのでしょうか。さまざまなアプローチがありますが、「何のために学習をするのか」というテーマで子どもたちと話をしていくことも一つの方法です。これは、ただ何となく、当たり前のように授業を受けている子どもたちが多い現状に対して、学習をすることが自分の未来につながっていることを示すという方法です。どんな夢をもっているのか、どんな仕事をしたいのか、どんな自分になりたいのか。自分の未来を想像することが、学習への意識をより明確にさせていくのです。

子どもたちに、学校で学んでほしいことは、教科書による学習だけではありません。友だちとの関わり方、周囲の人々と協力する姿勢、先生や、自分を支えてくれる人々への礼儀などもあります。これらは決して教科書を読んだり、暗記したりすることだけで学べるものではありません。日々の学校生活はもちろんのこと、運動会や文化祭などの学校行事を通して育まれていくことが期待されます。運動会や文化祭に積極的に参加することで人と協調する、行事の運営について話し合いを行い、自分の意見を述べ、人の意見を聞く。また、行事を円滑に運営していくために自分ができる役割について考える……さまざまなことを学ぶことができます。これらの経験は、やがて社会に出たときに、「生きる力」として大いに自分を助けてくれることでしょう。

教科書では決して学べないこともたくさんあることを知り、教科書を超えた部分についても広く学習することが大切です。

(文／学林舎編集部)

学習の行き先

常用漢字について考える

□常用漢字とは何か

「常用漢字」といえば、2010年(平成22年)に改訂された「常用漢字表」を思い浮かべる方が多いのではないのでしょうか。このとき、1981年(昭和56年)に定められた常用漢字に新たに196字が追加され、「俺」や「嵐」といったような、現在、私たちが当たり前に使っている漢字も、ようやく常用漢字の仲間入りを果たしました。

文化庁によると常用漢字表とは、

1. 法令、公用文書、新聞、雑誌、放送など、一般の社会生活において、現代の国語を書き表す場合の漢字使用の目安を示すものである。
2. 科学、技術、芸術その他の各種専門分野や個人々の表記にまで及ぼそうとするものではない。
3. 固有名詞を対象とするものではない。
4. 過去の著作や文書における漢字使用を否定するものではない。
5. 運用に当たっては、個々の事情に応じて適切な考慮を加える余地のあるものである。

と定義されています。

つまり、常用漢字とは、私たちが日常の生活で漢字を使うときに、この「常用漢字表」に掲げられた漢字と読み方(音・訓)をできるだけ使用するようにしましょうと、使用を推奨された漢字のことなのです。これらの漢字を使用することで、誰もが一定の数の漢字を効率よく使用できるようになったのです。

□学校で常用漢字を学習する意味

では、私たちが常用漢字を学校で学習する意味はどこにあるのでしょうか。

実際に、日々の生活の中で常用漢字を意識して生活

している人はほとんどいないと思います。「常用漢字表」が改訂されても、そのニュースを見た次の瞬間には使いたい漢字を使い、たまに出てくる読めない漢字に四苦八苦しながらも、特に大きな不自由を感じてはいません。しかし、このような生活を送ることができているのも、私たちがすでに常用漢字を学校で学んできたという背景があるからです。もし、常用漢字が定められていなければ、私たち一人一人が知っている漢字、使うことができる漢字に差異が生じてしまいます。そうすると、日常生活での漢字を使ったコミュニケーションに不都合が生じてくることは容易に想像できます。常用漢字が定められ、それをみんなが同じように学校で学習することで、私たちは知らず知らずのうちにスムーズな言語生活を送ることができているのです。

□漢字を学習することでどのような「知」が広がっていくのか

常用漢字を含めた漢字というものは、非常に便利で面白いものです。一つの漢字を最初に覚えるときは確かに大変ですが、ある程度の数の漢字を覚えると応用が利くことに気付いている方もたくさんいると思います。漢字の組み合わせや、それぞれの部首の変換などによって、形が似ている漢字は、知らない漢字であっても、その共通性から読み方や意味を推測することができる場合も多々あります。例えば、「彳(さんずい)」を部首にもつ漢字は、すべて「水に関係するものごと」を表す漢字であり、これを知っていれば、その漢字自体を知らなくても「水に関係するものだから……」と、前後の文章と合わせてその読み方や意味を考えるきっかけにもなります。

漢字一つ一つにはそれぞれの読み方や意味があります。そして、さまざまな組み合わせや変換を可能とするため、漢字を学習することで、暗記力だけではなく、創造力や発想力も鍛えられるのではないのでしょうか。

(文／学林舎編集部)



教育現場の行き先 進路を考える—高校生編

中学校卒業者の9割以上が高校や高等専門学校へ進学しますが、高校卒業後の進路の場合、最も割合の大きい大学等への進学でも全体の5割程度に留まっています。高校卒業後は、中学卒業後よりも進路が多様化します。今回は、それぞれの進路先について分析します。

○大学・短期大学への進学

平成29年度には、普通科高校卒業者の64.1%、農業や商業などの職業学科高校卒業者の20.9%は大学等に進学しており、高校卒業者全体ではその割合は54.7%になります。大学や短期大学には高校の普通科にあたるものはなく、学部ごとに専門とする分野が分かれています。そのため、高校で学んだことよりもさらに専門的な内容について理論や知識を学び、研究や分析を行うことで深い教養や技術を身につけることができます。

大学進学のための目的の一つは、目標とする職業に就くことです。医師や薬剤師、獣医師などの医療系の職業では、関連する大学の学部を卒業することが必須条件となっています。また、大学の卒業が必須ではないものの、弁護士や公認会計士、建築士などの国家資格や専門的な知識が必要となる職業に就くには、大学で関連する学部に進学し、専門的な知識を得ることが求められています。それ以外にも、大学の卒業を条件とする仕事は多く、大学で専門的な分野を学ぶことは、将来の選択肢を広げることに繋がります。

○専修学校への進学

平成29年度には、高校卒業者の22.7%が専修学校等に進学しています。専修学校は、理論を学び教養を深めることを重視する大学よりも、将来の仕事との関連性が強い専門的な知識や技術を身につけることができます。そのため、ほとんどの専修学校では実習や実験の割合が大きくなっています。

専修学校進学のための目的の一つは、特定の職業に就くた

めの専門的な知識・技術の習得です。専修学校進学者のうち75.4%は、いわゆる「専門学校」と呼ばれる専修学校専門課程へ進学します。工業や農業、医療、社会福祉や服飾、文化などの分野があり、より高度な専門的技術を身につけることができます。また、専修学校専門課程のうち32.0%は、「職業実践専門課程」に認定されています。これは、専門課程の中でも企業と連携し、実際の職業現場からの最新の知識・技術が身につけられる学校です。カリキュラム作成や実習・演習を企業と連携して行うため、実際に働くことを意識しながら学ぶことができます。このように、目標とする職業に就くために専修学校進学を選ぶ学生が増えています。

○就職

平成29年度には、普通科高校卒業者の8.5%、職業学科高校卒業者の53.1%は就職をしています。高校卒業者全体ではその割合は17.7%になります。大学卒業者に比べ、高校卒業者の場合は選択できる職業に限りはあるものの、普通科高校卒業者、職業学科高校卒業者のいずれも、就職希望の就職率は95%を超えています。大学や専修学校進学者に比べ早く社会に出ることで、社会人としての経験を多く積むことができます。

大学進学者の多くは、大学卒業後に就職をしますが、さらに高度な研究を求めて大学院へ進学するという進路もあります。また、最近では大学卒業後や在学中に専修学校に進学し、資格取得や専門的技術の習得を目指す学生も増えています。短期大学や専修学校の場合も、条件を満たせば卒業後に大学の3年次や大学院に編入することができます。就職し、何年か働いた後に、自分で得た収入で大学や専修学校に進学するパターンも少なくありません。

高校卒業後の進路は、自分の将来との結びつきが非常に強く、選択肢も多くなっています。自分の将来の姿を思い描きながら、自分に最も合った進路を選ぶよう、さまざまな学校や仕事について調べてみるとよいでしょう。(文/学林舎編集部)

クロスロード crossroad

第 74 回 文／吉田 良治

● 若者の政治への関心

昨年から 18 歳に選挙権が与えられ、早ければ高校生から政治参加が可能となりました。今月は衆議院の解散による衆議院議員選挙があり、18、19 歳にとっては最初の政権選択選挙となります。高校では模擬選挙をするところもあり、生徒の政治への関心を高める取り組みも進んでいます。長年若者の政治離れが叫ばれてきた中、特に高校生で選挙に対する意識は高く、総務省によると昨年の参議院選挙では 18 歳の投票率は 51.17%と、高い数字が出ていました。ただ大学生や社会人の多い 19 歳の投票率は 39.66%と、模擬選挙の授業を実施する高校もあることから 18 歳に比べ低い投票率となっています。但し、全体の投票率が 54.7%ですので、18 歳世代でも平均を下回っていることになり、まだまだ若者世代の政治への関心は、低い水準にあるといえます。18 歳選挙権実施前の平成 26 年の衆議院議員選挙では、20 歳代の投票率が最も低い 32.58%で、年代が上がるごとに投票率も上昇する傾向があり、60 歳代が 68.28%で最も高い数字を出していました。

私は以前、神戸と京都の大学でアメリカンフットボールのコーチをした際、選挙権のある学生は選挙のある時必ず投票に行くことを指導していました。自分の住む町や国、自分の将来に責任を持つことは、学生であっても社会の一員という自覚をもって生きていくことが重要となります。大学生が卒業したら新社会人という言葉方をしますが、学生も社会の一員という意味では立派な社会人であるべきです。就職して収入を

得ることだけが社会人ではありません。選挙権を持っているなら当然一国民としての権利を持っているわけで、その権利を行使することは国民としての義務でもあります。どの政党のどの候補に入れるのかは、それぞれの考えで決めるものですが、選挙に行くことは選挙権がある以上、投票に行くことは当然のこととなります。

2011 年 10 月に、当時阪神タイガースに在籍していたマット・マートンと一緒に、大学で授業をしたことがあります。その時授業のテーマの中に、若者の政治への関心もありました。その翌月には大阪で大阪市長・府知事のダブル選挙があり、大阪では政治への関心も高まっていました。そこで私はマートンに大学生にも政治への関心を高めるよう呼び掛けよう、と打ち合わせで話し合い授業の準備をしていきました。

マートンが授業で学生たちに伝えたことはとてもシンプルで、自分の人生に責任を持つのは自分しかいない。政治に関心を持つということは、自分の将来に責任を持つことを意味する！と伝えました。アメリカでは日本より早く 18 歳で選挙権を持っていたため、マートンも選挙権を持って以降すべての大統領選挙で投票をしてきたことを学生たちに伝えました。

アメリカの家庭では物心がついた子どもに、大統領の一般教書演説を聞かせることが一般的です。自分の支持政党の大統領でなくても、国のトップが国民に何を伝えようとしているのか、子どもにもしっかり意識付けしていきます。大人が子どもに、自分の将来と社会との関わり、国の将来についてしっかり意識付けすることが、政治への関心の最も重要なポイントといえます。

(つづく)

吉田良治さん Blog

<http://ameblo.jp/outside-the-box/>